

内にあづきを入、なまづきあづきもち、米半分ほどはつぶにて有是を箱の大サにきり、五ツかさね入、もちの間々へさゝの葉をしきのせもちといふ、丹波國野瀬の里より上ル、亥の日三ツあれば三度上ル、御所の仕丁とりに行也、野瀬もちを二ツに切、あいかわらけに入三方にて御まへ出ル、此次につくく出ル、亥の日三ツ有時、初菊あとのぶの葉三度とも入中紅葉下鴨脚、夜御前江赤黒の餅十計、菊紅葉鴨脚の時葉を敷、もちをかわらけ五ツに盛ならべ、足打にのせ二膳出る、はしなし、此次につくく御前よりすべる、當番の堂上方へ出る時、表使の女中きぬをかたにかけ、左のかたにかける、持まるり直にかへり、伊豫の局へさがるなり、宮々大臣以上上膳の御方へは、くろもち壹ツ、引合紙うすやう包にして、小かくにのせ、白紅の水ひきにて十文字にむすび被下、其外堂上方大奉書にて包、堂上の家來長橋のそゝ亥や所へ、硯ぶた持參申請かへる、御内々相勤地下の者には白もち壹ツ、杉原かみにて、うすやう包にして、人數ほどぶんこのふたに入被下、
〔光臺一覽〕十月亥之日を玄猪とて、則内侍所等御拜有備物は赤白黒之小餅を調べ、亥のぶもみち、なんてん杯の物の葉を入れ、大奉書を蝶花形に折込み、内侍所へ被供し跡を、天子御頂戴有故に、縁を求て下へおろし、厄よけ病よけの頂き物と致す事也、此備の名を内侍所のおくま共、又は御玄猪共申なり。

〔故實拾要〕五月
十月亥日御獻、此御獻自御臺所三獻供之、又玄猪ノ御祝アリ、土佐衛士等ヨリ獻餅、是代々今日獻ジ來ル家也、又丹波國野瀬郷ヨリ折敷合獻之、是代々獻ジ來ルニ依テ也、凡玄猪ノ爲御祝、親王攝家清華、諸家中ニ賜御餅也、長橋於奏者所以使者受之也、但外様ノ面々如此、近習伺候ノ面々ハ、於御前賜之也、又此餅ノ色位階ニヨツテ替リアリ、五位ハ赤一ツ白一ツ也、四品以上ハ黒一、白一也、是ヲ大奉書紙ニ包、内ニ紅葉銀杏垣衣ヲ入テ包之賜也、

〔日次紀事〕十月
斯月亥日 禁裏賜赤白黒小團餅於群臣謂之御玄猪、或稱嚴重、又謂嚴祥、女中御下